



おっぱい
おっぱい

ADULT ONLY!!



おたけ
おたけ

こんにちは、酔花ころんです。

ごっちゃん×志乃ちゃんと松山桐乃進×加代姉。
少しでも楽しんで頂けたら幸いです。

松山桐乃進さまのエロは一度書きたかったんだけど
私が書くと志乃ちゃん相手だとDVにしかなんないなーと
(いや、それも描きたかったりもしたのですが)
あえて加代姉とのからみにしてみました。
イラストもつけたかったけど、時間切れで描けずに残念です。

以下、妄想語り。

さて、サムライうさぎ、赤マルジャンプの最終話で
ごっちゃんと志乃ちゃんの娘(!)が登場するらしいので楽しみ。
それはつまり、えっちしちゃったって事ですね。
何てことだ。

清木さまとの因縁や流人達も気になるのですが
その辺は単行本かなー。みんな幸せになってるといいな。

…個人的に志乃ちゃんの娘と清木さまがくっつけば
政治的な意味で円満解決な気がします。
えーと清木さまって30歳ぐらいかなー。
で、そのころ娘が生まれて15歳ぐらいでとしたら、
年の差30!! …年の差に萌える。
清木さまは美形だから30ぐらいでも大丈夫だとおもうんだけど。ダメかなあ。

ぜひごっちゃんの所に嫁とりの挨拶にくる場面がみたい…。

妄想、ごめんなさい。
でも調子乗ってきたんでさらに妄想続けます。

スズメちゃんはマロに片思いっぼいのが
かわいいけれどここは
マロの弟、良くとくっつけばエロいと思っています。

マロの感情がイマイチ読めなくてじりじり
苛立ってるスズメちゃんに
小姑根性丸出しでイジワルする良くん。
でもお互い、「マロ何考えてんのか分かんねええ」
& 「ちよっちはなんで分かるんだよちくしょおお」
で何気に気が合う愚痴りあいなんかしてて
なし崩し的にエッチな事になったりするといーなー…なんて。

そんでもってするだけの事はしちゃってから
スズメちゃんは「どうしようスキでもないのにしちゃった…」な感じで
良くんは「なんだかんだいっても兄上が気にかけてた人に
えらいことしてしまったああああ」とお互いあさってな方向で
悩みつつ、なんだか気まずくも気になる関係になったら、と。うん。

あー…でもマロがどう思っているかが
どんどん押しってちゃう姉さん女房っぼい
スズメもかわいいかもー。

でもってモズクとの関係も気になるのですが。
全員と幼馴染だけどモズクのマロを気に欠けるスズメちゃんへの
ヤキモチのやきっぷりがたまらんです。
(あのシーンをそうとしかとれない脳の腐りっぷりがスミマセン)
モズク→スズメ→マロマロ希望。

要はスズメちゃんなら誰とでもイイです。結論。

ではでは、だいぶ長くなってしまったので(もっともっと言いたいけど!)
とりあえずなし崩し的にですが終了~。



ごっちゃん…

あたし
ダメな
お嫁さんだ

ごっちゃんが
辛そうなの

もうやだ…



じゃあオレは
志乃がそばに
いてくれる
限り

辛いことも
痛い思いも
何もないな

むしろ



うれしくて
楽しい事
ばかりだ

ぽん

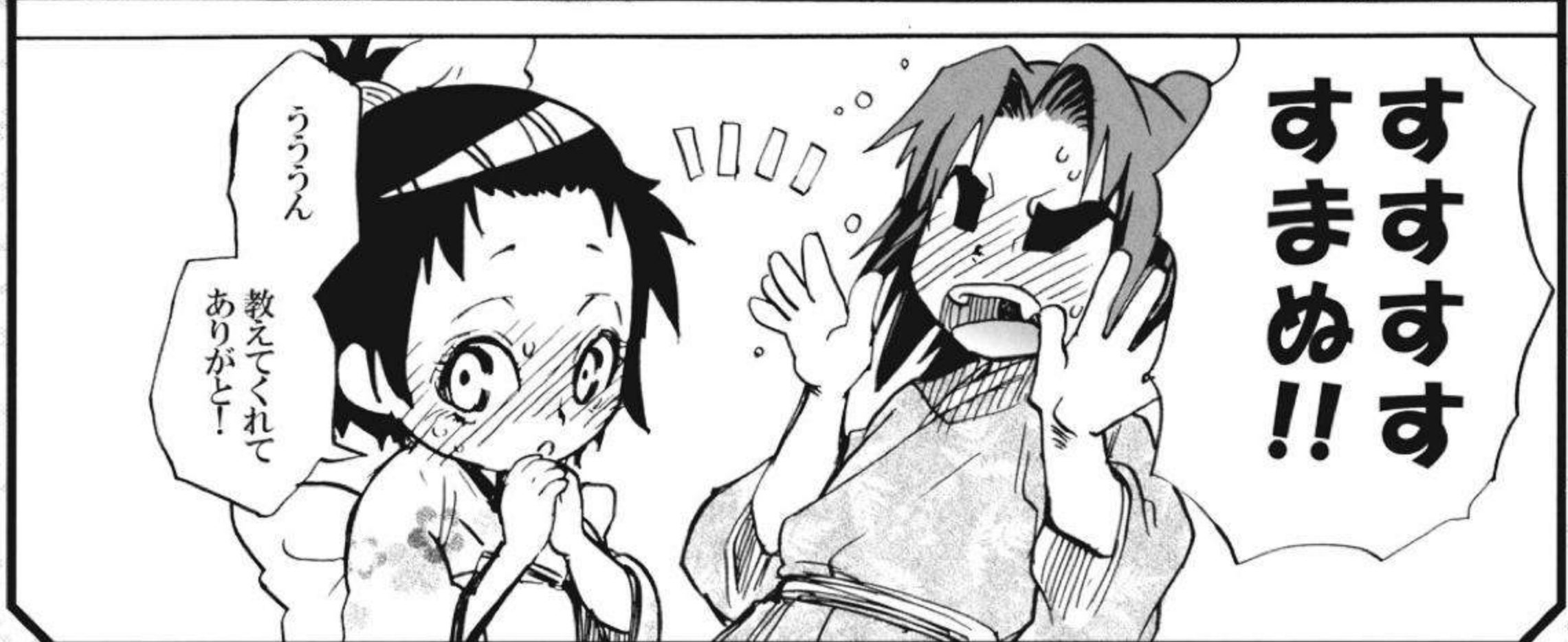


何？

そ
うだ

そ
うい
え
ば
オ
レ
も
ひ
と
つ
ケ
ガ
の
直
し
方
を
知
っ
て
る
ぞ

そ
う
だ
な



媚薬の
作り方
とか♡



3!!はっ

話題を
変えるか



ほ、他に
どんな事を
習ったんだ？

えっとねえ



あ、コレが
そーだよ
ちよっと
ニガいかなー

寝る前って
それは

その



媚薬

しっ!?

うん

おかーさんが
毎日寝る前に
飲むといいつて



志乃が
びさく♡を

前に服用する

それはつまり「^{まっほん}事」を越してほしい
という意思表示であつて
それに応じない
というのは決してこの
責任を

どきどき



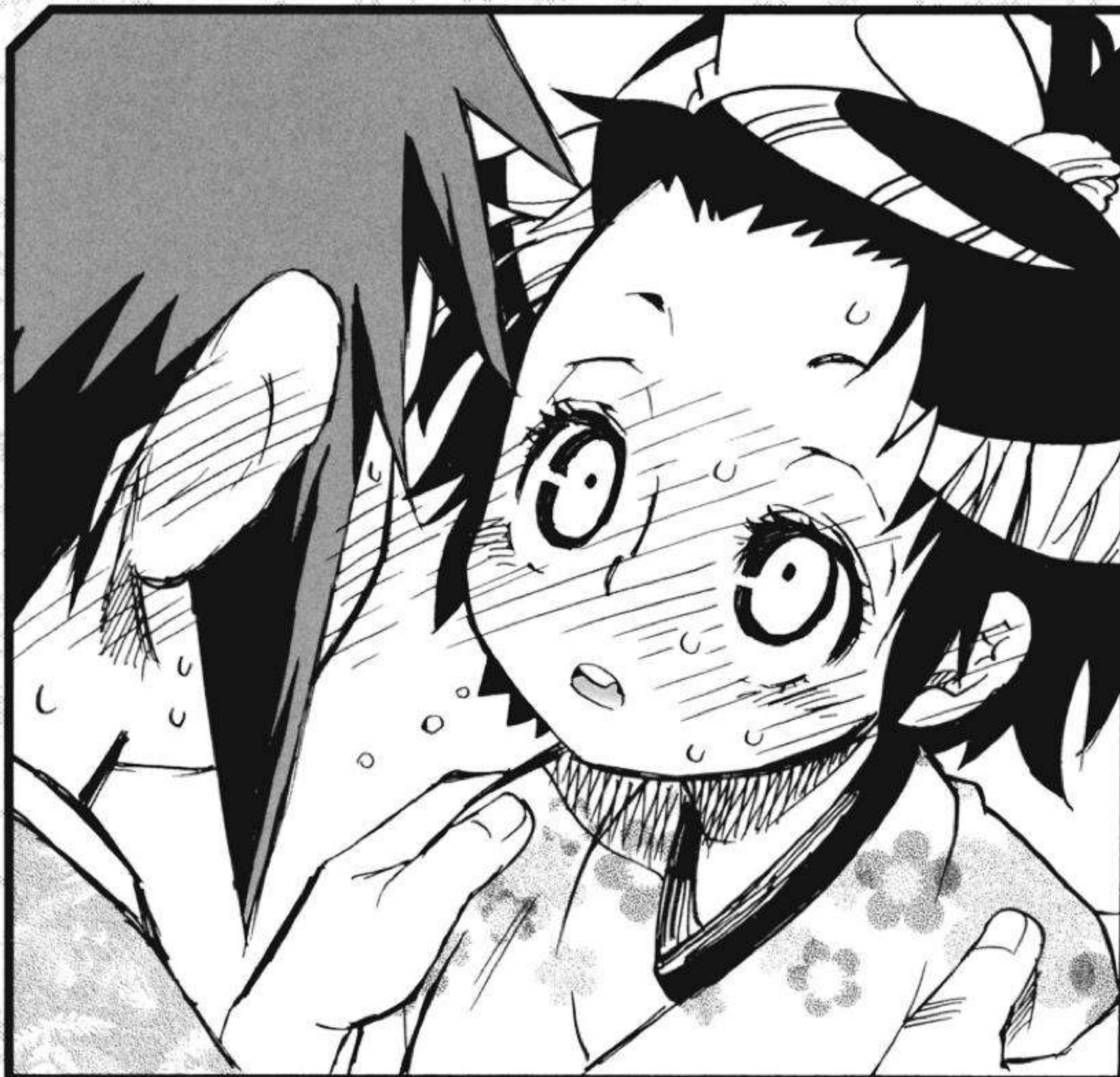
果たして
いないという
ことに他ならず
そもそもオレがちやんと
していいれば志乃にそんな
気づかいをさせる
必要もナイわけだ

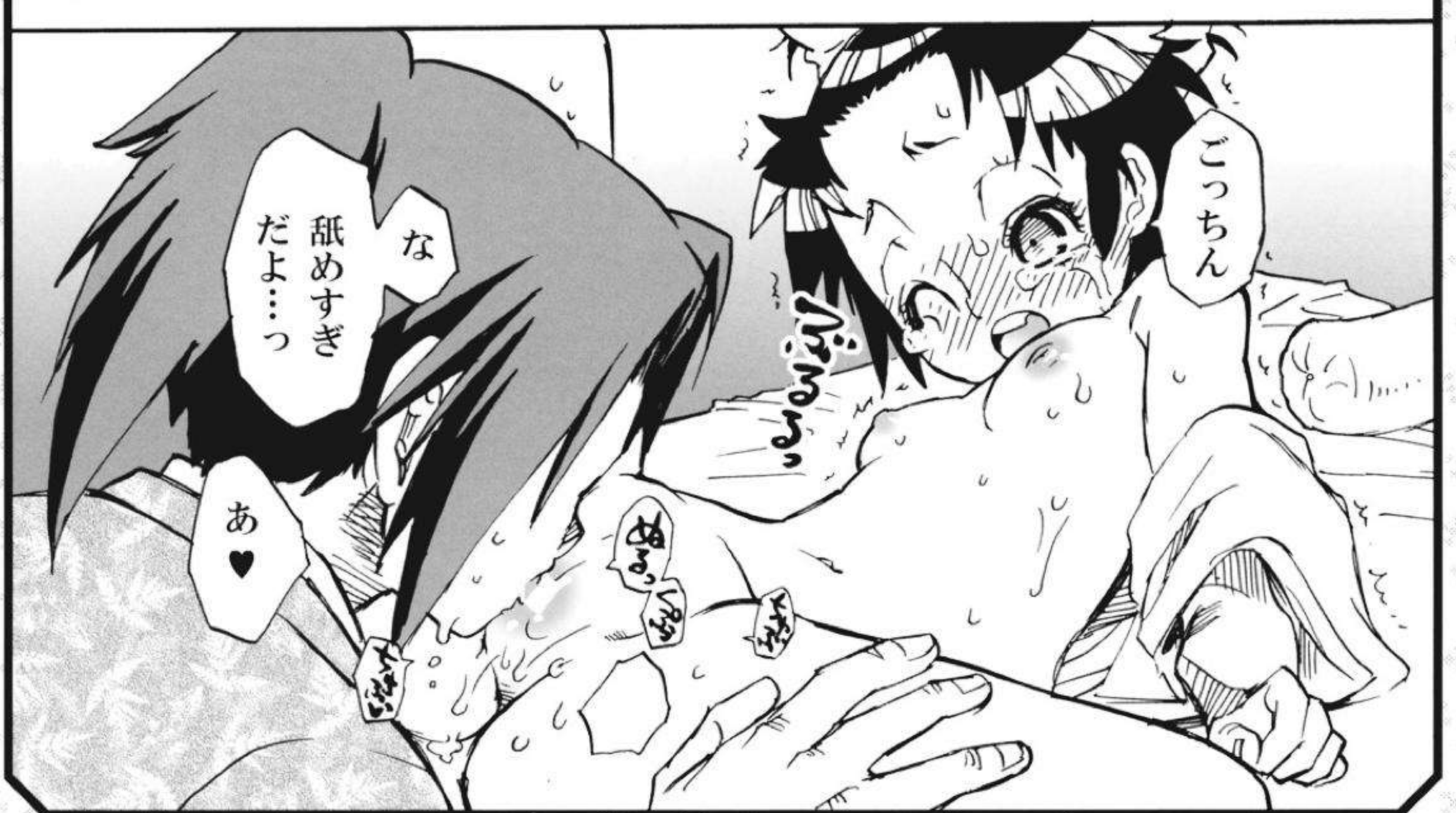
あづくオレが手を出さなかつたらお
自分の色気が足りないのには
と自分を責めるよりも
なつたりなぞした
事を泣かせる共に



志乃!!









大丈夫だよ

ごっちゃんがちゃんと
「痛いので飛んでけ」
してくれたもん

それに



志乃にそんな思いはさせたくない

しかし前に一度した時に痛がっただろう



かああ

おなあ

その
どんどんえつちな気持ちになっていつちやう所を

そんな風に広げられて見られるのは恥ずかしいよ……



おんかん



志乃

志乃

はうんっ

はうんっ

はうんっ

はうんっ

あ♡

ふあっ

あ♡

志乃
志乃

志乃!!!

アッ! アッ!





夏の夜

山際に陽がおちるのはこの村ではとても早い。よつて夜の時間はとても長かった。

七つ下がり(午後四時過ぎ)も過ぎればまだこの頃は夏の暑さもあるのに辺りは暗くなってくる。

とほしい川に沿ってある村は老人が細々と生きていくぐらいの収穫があればいいほどのまずしい暮らしぶりだ。

また、最近では海への買出しに夜、山越えするのをはばかられる様になった。

山賊が出るのと噂にこのあたりでは人影もなかった。

その暗がりの中に溶け込むように男が座っていた。

ぼさぼさの髪は金色で、右目の上から頬にかけて三本の傷が月の光に深い影を刻んでいる。

やつれた風貌と不精髭が浪人生活が長いのを伺わせる。先ほど手に入れた握り飯を食べ終えて一息つき、

山中の洞穴で眠ろうと立ち上がった。川のせせらぎの音にまじって

なにやら女の声があった。

声のする方を木陰から伺う。暗い山道に鮮やかな緋色の袴と白い着物。

ふらふらとしたおぼつかない足取りにへらへらとわらべ唄らしき鼻歌をうたっている。

よくは聴き取れないがあまり上手くはなさそうだ。襟元が緩んでいて白い胸元が月に照らされ輝やいている。

こくりと喉が鳴る。そういえばもう何か月も女を抱いていない。

日々、食うのにやっつとで忘れていた。日々、食うのにやっつとで忘れていた。

たらふく食べた今夜はそういう余裕も出来たのか女が欲しいと体が訴えかけてきた。

見ればその装束から巫女かと思ったがこんな酔っ払いの巫女などいるまい。

おそろく遊女のたぐいで扮装をしているのだろう。それならば……

「あ……」突然暗闇から躍り出た男の影に女は驚いたのかぐらりと崖に体が傾いた。

男の手が女の腕を掴みひきよせ、草の上に押し倒す。女は何の抵抗もなく組み伏せられた。

「……ははっ」そのたやすさに思わず笑いがもれる。何だこの女。

腰ひもを緩めて、はだけていた肩に手をかける。覗きこめばふくよかな双丘がこぼれおちそうだ。これは楽しめそう。

「……」女が何事かつぶやいた。

「何だ？」何、すぐに股を開かれるよりは少しぐらいの拒否の言葉があった方がより楽しめるものだ。

顔を近づけ、伏せていた女の顔を掴んでこちらにむけさせる。酒に紅潮した頬に長い黒髪が乱れかかり、なかなかになまめかしい、いい女だ。

「言いたい事があれば好きにだけ言え。あいに金はないぞ。ここで俺に会った事を不運と……」

俺が言い終わらぬうちに女は一言、

「も、無理。」聞き取れるかどうかの言葉と共に女は盛大に吐瀉物を男の顔面にぶちまけた……

「ごめんねえ、助けてくれたのにさあ。」

まだほのかに酒と吐瀉物の匂いをさせながら女はへらへらと笑いながら謝ってきた。どうやら崖から落ちかけたのを俺が助けたと思いきこんでいるらしい。

当然ながら股間はすっかりおとなしくなっていた。

小川で濡れた髪を拭いながら女を振り返る。夜風が冷たい。

女に濡れた手ぬぐいを投げてやりながら女の横に腰をおろす。はだけた肌を夜風が心地よい。

「ここら辺じゃ見ないカオだね。旅……の途中なのかい。浪人さん？」

この先行ったって士官の先なんてありやしないよ。ごしごしと顔拭いながら女が話かけてくる。

「士官なんぞする気はねえよ。ここに来たのも別に行先があるわけじゃない。」

「アラ、そうなの。」

そうそう、ここらへん、ちょっと最近ぶっそうなのよ。山賊が出るらしくてね。あんまりウロウロしないほうがいいよ。」

「……はア？ お前はウロウロしてたじゃねえか？」

「あははは、そーいやそーだね。だってホラ月がキレイだしお酒はおいしいし！家の中も蒸し々々して。こんな夜はふらふらしたくなるじゃない？」

変な女だ。がさつな物言いがいかにも田舎の女だ。

それにしてもひきよせに言葉が次々と出てくる。こんな女の話など聞く必要もないのに。

なぜ、先ほどの一件の時にすぐに切り殺さなかったのか……ああそうか、命乞いの言葉しかこしはばらくは聞いたことがなかった。

「いいよねえ、ゆっくり旅つてのもさ」

「：したいならすればいいだろうが」
「うん。そーなんだけどね。村の事を思うとあんまり離れられなくてねえ」
「遊女でもっている村か。」
「遊女？」
「女は男に遊ばれたり、尽くすために生まれた存在だからな。それぐらい役に立たなければ意味が無い。まあ、村の為に尽くすとは健気な方だろう」

「ふふ。遊女：遊女ねえ？」

女は何かを含んだような笑いをすると、するりと下腹部に手を伸ばしてきた。

「な：ッ」

小川の冷たさに縮んでいたモノは女の手に簡単に

握られた。

「あはは、かわいいねえ」

「何をする！」

「いいっていいって。気にしなさんな。」

俺のモノをまさぐり、強引に引きずり出すと吸いついてきた。

ぷっくりとした唇が包み込みくぶくぶと音を立てながら喉まで入れると

舌で剛直の腹をなでる。

言葉とは裏腹にさっきまでおとなしかったのが嘘のように敏感に反応する。

「ふふ、かわいい」

「馬鹿にするな：っ」

女を押しつける：が、自分でも驚くほど快楽に飢えていたらしい。

わずかな刺激に女の口から抜き取る時に軽く放出してしまった。

「：アララ」

「くそ：っ。貴様のせいだぞ。俺はこんな：くそ：くそ：くそ」

言えはいうほどにまるで子供がだだをこねているようだ。

「くそ：くそ：くそ：畜生」

恥ずかしさから苛立ちだけがつのる。

「ごめんね。ちよっと意地悪が過ぎたかも。」

おに：さん、あの子に似た感じだったからさ」

「はっ：なんだ？」

振られた昔の男に似てるとかか？どうせ今みたいに勝手な事ばかりして

男をイラつかせて捨てられたんだろう」

「んーん。弟。まっすぐで一本義なんだけど

それがちよっと融通がきかないっていうか。心配してたんだけどね。

色々な友達が出来たらしくてさ。」

するりと腕を首に絡ませてくる。

「なんだかね。うれしんだけど。」

ただちよっと、あれだけアタシになついていたのになあって：さ」

女の温もりが伝わる。

「で、似てるなあって」

「はあと耳元で息を吐いてくる。」

「アンタも融通がきかなさそうなかオしてるね。」

「：慰めてあげよっか？んん？」

「いいかげんにしろ」
こういう女は好きでは無い。
勝手な事を言い、勝手な事ばかりをして俺を苛立たせる。
：斬るか。

だがその前に。

せつかくの誘いだ、楽しませてもらう。

どうせこの女もその気なのだ。

預けてきた体をそのままぐいと抱きよせ、

袴の脇から手を差し込みむっちりとした肉付きのいい尻をまさぐる。

「ひゃんっ」

指を秘裂に這わせるとそこはすでにぬるりとした感触があった。

「ふん、酔っぱらった上に情欲に流されるとは。遊女としても安い部類だな」

秘裂に指を入れ、ぬるんだそこをこすってやる。

「あっあっあっ」

くちゅくちゅとわざと音を立てて女に聞かせる。

「どうだ？欲しいのか？欲しいのなら

自分から挿れてみる。」

「：おに：さん、意地悪だねえ」

睨みつけてくる女の表情にはそれでも期待に答えてもらえた喜びが垣間見える。

座った所に向かい合うように女がまたがり、腰を下ろしてくる。

秘裂を俺のものにあてがうとしたたる液をこすりつけてくる。

「：んんっ」

「一人でたのしんでるんじゃねえよ

俺を楽しませろ」

「や：はあんっ」

腰をつかんで引き寄せると濡れそぼった秘裂にねじり込んだ。

「ああああっ！」

女にとつては少しキツかったらしい。

しかしその秘裂を押しあける感覚は自分にはたまらない快感だった。

体と体を合わせるのにはこんなにも心地いいのを忘れていた。

「はひっはっ。ふうううん：っ」

女が呼吸を整えるのを眺めながら腰をゆっくりつきあげる。

どうこう言っただけはいたもの、ほどなく、じゅぶじゅぶと繋がった所から蜜が溢れ出す。

「ん、はあん：」

甘い声にかわりだした女の襟を引き下ろし、

気になつていた白い乳房を月の光にさらす。

「あ：んんっ」

少しは恥じらった表情を見せたが、すぐに下からの突き上げに気がそれたようだ。

おおきな白い餅のような乳房が揺れて目をちりちりと刺激する。

思わず手を伸ばすとやわらかな弾力とともに

温かさが伝わる。

もんでやると紅色の突起がみるみる膨らんだ。

つんと触ってほしいと主張している突起にむしゃぶりついてやる。

「あ：はあんっ」女がのけ反る。

口にほおぼり、揉みしだく。

乳房が手の隙から逃れるかのように形を変えて翻弄する。

女も自分の腰を使い始めた。

「はっ：あ、ふうん」

甘い声をあげながら足を絡みつかせる。

密着した体同士が夏の暑さもあってじつとりと汗ばみ、みちみちと音をたてる。

「あふ：んっんっ」

俺の体をむさぼる女の胸の谷間に浮かぶ汗を吸う。

「あ：っああっ」

女が高く声をあげる。下からのつきあげに

もう耐えられなくなっているらしい。

反り返った女の乳房を下から乱暴にもんでやる。

「やだ：っ。それだめ、だめ、だめっ」

つまみあげた乳房の刺激に女が歓喜の悲鳴をあげる。

きゆうきゆうとせつなげに締め付けてくる秘裂がとろけそうに熱い。

「も、だめ、だめ：っ」

イクことを拒否する女の姿に思わず愛しさを感じてしまう。

もつと喜ばせてやりたい。

自分の中にこんな感情があったとは。

「女、いいのか？」

「いい：っ気持ちいい：っ」

跳ね上がる女を抑えつけながら

荒い息を吐く。

「はあっあっあっもうだめ：っ」

腰の動きに合わせて女の声はどんどん高ぶっていた。

「いきたいのならいけ！いっちまえ！」

豊かな乳房をちぎれんばかりに揉みしだきながら

暴力といつてもいいほどの衝撃を女に打ち付けて絶頂に導いてやる。

「もう、いくっいくっううっ！」

がくりとのけぞり、ひととき大きな声をあげた。

ひくひくとわななく女を見つめながら白濁を注ぎ込んだ。

「女、名前は」

荒い息を整えながら竹筒の清水を飲みほす。

「やだなあ、野暮な事は聞かないでよ、おにーさん。

そんなんじやモテないよ？結構いい男なのにさ。」

：最後までイラつく女だ。

抱いている時にかわいげがあったと思ったのはやはり気のせいかな。

まあいい、名ぐらい聞いてやるかと思ったがそろそろ斬るか。

「と、そーだ。

おにーさん、お腹へってない？」

「：」

「昨日作ったのがあまってき、一人で食べるのも

味気ないでしょ。どーせ、目的なしの旅だつて言うしき。

よかったらウチによつてよ。いっしょに食べよ？」

「施しを受けるつもりはない」

「施しじゃないよ。」

：あ。もしかして。

うわ、それはちよつと困るなあ」

「：何だ」

「ごめんねえ、正直、アタシじゃおにーさんの事を養えるほど稼げないんだあ。

ウチ、酒での村おこしに必死な貧乏村でさ。

ま、その分酒だけはあるんだけどね。」

「な、き、貴様っ

俺が貴様のヒモになりたいと：っっ？」

あまりの女のいいように口がばくばくと動くばかりで

ちやんと話せない。

なんだこの女のこの女この女：っ！

「ふさけるなああああっ」

傍らにあった刀をひつつかんで一刀のもとに：出来ない。

というより、刀が無い。

「か、刀が：っ」

「刀？あー：っさういやさつきアタシを助けてくれたときに

崖の下に何か落ちてつたような：あれがそうかなー」

「なななんですぐに言わなかった！」

「だって吐いてて気持ち悪かったんだもん」

「もういい！」

こんな女の側にもう一刻たりともいたくはない。

もうすぐ日ものぼる。

気の早い蝉まで鳴き出して苛立ちに拍車をかける。

こいつは知らないようだが俺は人相描きもまわっている。

ここらでの強盗ももう知れ渡っているようだし

あまり日のある所にはいたくはないが刀はみつければ。

とにかく他の土地に早く移るべきだ。

「あははは、やっばりおにーさんかわいいねえ。

ま、また気が向いたら遊びにおいでよ。

まってるからさ」

立ち去る俺の背中に女の声がかかった。

ふさけるな。二度とくるか。



スズメ 「ホントにこんなので胸がでかくなるのかよお」
鶴屋 「やだなあ、スズメさん知らないんですか？」
スズメ 「し、知ってるって！バカにすんなよ！」
百舌九 「・・・小さい・・・」



「すきすきうさぎ」(400円)
2008.08.15発行
印刷・大陽出版
篠花ころん(すいか時計)
メール: suikadokei@yahoo.co.jp
URL(PC用): <http://www.kcc.zaq.ne.jp/suika/>

この本の禁止事項
18才未満の方の購入&閲覧
無断転載 及び 複製(ネット公開、CDROMなども含む)
オークションへの出品(成人向けにつき特にお願致します)

どうぞご協力のほど、宜しくお願い致します。





